

みんなで作る みんなでつかう 災害アーカイブ

資料の収集・活用・運用



○荒川 宏

(特定非営利活動法人ドゥチュウブ)

小山 真紀 (岐阜大学)

伊藤三枝子 (災害アーカイブぎふ)

平岡 祐子 (災害アーカイブぎふ)

中村 貫志 (災害アーカイブぎふ)

柴山 明寛 (東北大学)

井上 透 (岐阜女子大学)

千葉久美子

(一社 三陸&東海防災フォーラム伝)

はじめに



災害アーカイブぎふは、

大きな被害のあった災害も年が経てば忘れ去られてしまうことを憂慮し、
災害写真をデジタルアーカイブ化することで、過去の災害を若い世代や後世に伝え、
ワークショップなどの防災活動で活用してもらおうという活動をしています。



災害アーカイブは、

データの蓄積と活用が期待される機能・役割であり、継続的な運用が重要。
データの蓄積はできていても、活用やサービスの継続が難しくなる場合があります。
そこで、データの収集・蓄積から活用までの事例を紹介した冊子を作成しました。

冊子「みんなでつくる みんなでつかう 災害アーカイブ」は、

過去の災害を記録した写真などを掘り起こして活用するという活動を、地域に広める効果があると考えます。

これにより、災害を思い出し未来に伝えるとともに、災害に備える防災活動を促進することができると考えます。

冊子の内容



はじめに

1. 災害アーカイブってどんなもの

- 1-1. 災害アーカイブの活動目的
- 1-2. みんなで作り、みんなで活用する災害アーカイブとは
- 1-3. なぜこのような災害アーカイブが必要だと思ったか
- 1-4. 災害を伝える資料

[寄稿 災害アーカイブの動向と災害アーカイブぎふの特徴]

2. 資料を集めよう

- 2-1. 資料収集の考え方
- 2-2. 資料収集の方法
- 2-3. 資料の権利処理は確実に行う
- 2-4. 資料の位置情報・時間情報を確認する
- 2-5. 個人情報の取り扱いに注意しよう
- 2-6. 提供された資料は受取台帳に記録する

[寄稿 災害資料デジタルアーカイブ化の権利処理]

3. 資料を使おう

- 3-1. どんな人・場面に使ってもらうか
- 3-2. ワークショップでの活用
- 3-3. パネル展での活用
- 3-4. 学校の防災教育などの教材に使用
- 3-5. 新聞などメディアでの活用
- 3-6. ホームページでデータ公開

[寄稿 防災教育における災害アーカイブワークショップの効果と可能性]

4. 資料をデジタル保管しよう

- 4-1. 資料をデジタル化する
- 4-2. 地図データのGIS化
- 4-3. デジタルデータの保管
- 4-4. データ保管場所の確保

5. 資料をデータベース化して管理しよう

- 5-1. 資料のかたち
- 5-2. アーカイブシステムの概要とデータの流れ
- 5-3. アーカイブシステムの運用

6. 災害・防災関連の既存情報も活用しよう

- 6-1. 災害データベース
- 6-2. 防災に役立つ地図情報
- 6-3. 参考資料

7. 活動の工夫

- 7-1. 定例会
- 7-2. 役割分担
- 7-3. 共有のメールアドレスを作成
- 7-4. 共有フォルダで共有している情報
- 7-5. マニュアルで作業手順を明確にする

8. 用語集

おわりに

附録1「対面ワークショップ時のスライド例」

附録2「オンラインワークショップ時のスライド例」

災害アーカイブぎふ の特徴



デジタルアーカイブの専門家ではなく、
防災活動をしている人のグループが作成

メンバー構成は多種多様。

- ・ 女性防災士会の会長
- ・ 地域の防災活動を支援している人
- ・ ITにあかるい防災士
- ・ 地域防災を専門とする大学研究者
- ・ 大学研究者が指導する大学院生



資料を集めて管理することに興味の主眼があるわけではない。
地域の人が**災害を忘れない**ための防災活動に災害当時の写真が役立つと
考え、より多くの人に**災害写真を使ってもらおう**としている。
提供資料を誰もが使えるように、**CC-BYで公開できる許諾**を得ている。

冊子の特徴



活用を意識した災害アーカイブの構築・運用・活用を紹介

[趣旨]

「災害写真を活用して災害を現代の若者に広めたい、後世に伝たい、」という、私たちの**思いや活動を広めたい**。

[内容構成]

「私たちも**同じことをやってみたい**」と思ってもらえる内容・書き方に心がけた。

[掲載情報]

自分たちと同じような活動を行いたいグループが**必要とするであろう情報**を載せた。

とくに、**自分たちの体験談**を織り込むことにより、活動をイメージしやすくした。

[ちょっとした工夫]

メンバーの似顔絵を描いてもらい、コラムごとに**著者の似顔絵**を載せて、親しみを持ってもらえるようにした。

冊子の効果



冊子を受け取った人の反応

1) ワークショップをした人、地域からのコメント

・冊子を手にして災害記録が少なかったワークショップを思い出した。そこで記録を探してみたら**災害当時の写真が追加で出てきた**。

2) ワークショップを開いていない地域の人からのコメント

・当学校周辺も浸水害があったが、当時の写真は残していなくて残念に思う。これからは**災害時の記録を残したい**と思う。図書館に置かせてもらいます。（中学校）

3) 資料集でお世話になったため冊子を寄贈した図書館からのコメント

・皆様の活動が、**多くの人々の大切な命を守る重要な活動**であることを改めて認識した。今後は資料を大切に保存し、市民に利用していただきたい。（市立図書館）

4) これから災害アーカイブワークショップを開催する地域からのコメント

・過去の災害をワークショップで取り上げてもらえるのは行政としてもうれしい、**子どもたちに災害に負けずに頑張ってきた町の様子を伝えて欲しい**。（市役所）

5) 県外の防災士からのコメント

・**災害アーカイブ誕生から活用方法まで詳しく書いてあり**、家に眠る資料を提供してみようとか、展示、ワークショップをやってみようという人へ向けて**参考になると思った**。

まとめ



災害アーカイブは、地域の活動により構築していく

災害写真を集めるというスタンスではなく、地域の活動を通じて写真が集まってくるという枠組みが理想と考えます。

災害写真の提供を受けたら、地域のワークショップで位置特定をすることも災害をふり返る面で効果的と考えます。

災害アーカイブは、地域で活用することで受け継がれていく

数ある写真の中から地域の状況に応じて写真を選び出し、ワークショップやパネル展などで活用することが、災害アーカイブの醍醐味だと考えます。

地域の人たちに写真を見てもらうことにより、それらの写真と共に災害の記憶や教訓が若い人たちに受け継がれていく効果があると考えます。

災害アーカイブは、他地域との連携により効果が増大する

アーカイブ活動は手探り、試行錯誤の連続です。他のグループの活動を参考により、運用を維持・継続する手法の向上につながると考えます。

他地域の災害事例にも接することにより、自分たちの地域で起きた災害をより深く理解できるようになると考えます。